竹内好『日本とアジア』

片岡樹

アジアにおける自前の近代とは何か、特に日本においてそれはいかに達成可能か。これが本書全体に通底する問いである。この問いを展開する中で著者は、伝統の重さにつぶされそうになりながら、あえてその現実を引き受け、自分たちの伝統を乗り越える言葉を自分たちの伝統の中から立ち上げようとする近代中国の思想的試みへの共感を表明する。そしてその共感が、大きな心理的葛藤抜きに攘夷から文明開化へ、欧化主義から国粋主義へ、軍国主義から戦後民主主義へと転身してきた日本の知識人たちの知的退廃に対する警鐘へと結びついている。 ではそもそも自前の近代とは何なのか。またそれが必要なものなのかどうか。本書を手がかりにそうした議論を楽しむための触媒として、梅棹忠夫の『文明の

をすすめたい。前者は、日本と他のアジア諸国との文明史的相違について、本書とは正反対の立場からではあるが、よく似た結論にたどり着いている。また後者は、近代的ネーションを構築していく試みの中で、日本（およびタイ）をその変則的な事例として周辺諸国との比較を行っている。

出典:

- 竹内好『日本とアジア』（ちくま学芸文庫、1993年）

関連ワード

想像の共同体